

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：80101

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18H00748

研究課題名(和文) 北方四島と千島列島における人類活動史の考古学的研究

研究課題名(英文) Archeological Research on the History of Human Activity in the Four Northern Islands and Kuril Islands

研究代表者

右代 啓視 (USHIRO, Hiroshi)

北海道博物館・研究部・学芸員

研究者番号：30213416

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,200,000円

研究成果の概要(和文)：次のとおり総括した。北方四島の現地調査は、択捉島16カ所、国後島94カ所、色丹島22カ所、歯舞群島の勇留島1カ所、総計133カ所の遺跡データを総括。国内機関に保管されている千島・北方四島の考古資料のデータ化を実施。千島・北方四島の物質文化的な連鎖は旧石器文化からはじまり、北千島ではカムチャツカの人々と文化的に融合し、縄文文化からの狩猟採集社会の持続可能な自然環境と資源が存在していた。旧石器文化～アイヌ文化までの長期、北海道の先史文化が主体的に存続していたことを明らかにした。千島・北方四島の民族的な文化接触、あるいは中央社会との物流交易は、8世紀以降から強まることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、人類活動史の空白域である北方四島と千島列島の考古学的な歴史・文化構造を解明し、学際的かつ実証的な総合的研究として意義深い成果をあげた。北方四島の現地調査では在住するロシア人研究者と連携し、歴史・文化の共有を友好的に理解し社会的な意義を高めた。また、自然生態系や地質地震系の研究者とは研究成果の共有をはかり、学際的な貢献を果たした。特に、国が示す北方四島の歴史を先史時代の旧石器文化からはじまることを明らかにし社会貢献につながり、北方四島の歴史・文化を次世代に継承する重要性を元島民と共にシンポジウムや講演などで公開し、正しい歴史認識がもたれたことは北方領土問題解決に貢献する一助となった。

研究成果の概要(英文)：Research results are summarized as follows: The field survey of Four northern Islands summarized data from a total of 133 sites: 16 on Iturup Island, 94 on Kunashir Island, 22 on Shikotan Island, and 1 on Yururi Islet in Habomai Archipelago. Archaeological collections of Kuril Islands and Four Northern Islands, which are kept by domestic institutions, were digitized. The material-cultural expansion into Kuril Islands and Four Northern Islands began with Paleolithic culture period and cultural fusion with the people of Kamchatka was observed on Northern Kuril Islands, indicating the existence of a sustainable natural environment and resources for hunter-gatherer social structure from Zoku-Jomon culture. The prehistoric culture of Hokkaido existed unaffectedly over a long period of time, from the Paleolithic culture to Ainu culture. Starting from the eighth century, ethnocultural contact or logistical trade with central society in Kuril Islands and Northern Four Islands intensified.

研究分野：考古学

キーワード：北方文化 先史文化 江戸・明治・大正 アイヌ文化 オホーツク文化 擦文文化 縄文文化 縄文文化

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

北海道とカムチャツカ半島をつなぐ北方四島と千島列島は、戦前に鳥居龍蔵、河野常吉などに代表されるように多くの研究者が日本北方域の歴史認識、あるいは人種論にかかわる研究が進められ人類学、考古学、民族学などからのアプローチで展開した。しかしながら、この地域におけるフィールド調査は極めて少なく、基礎的なデータが欠落しているのが現状である。戦後、このわずかなデータを手がかりに北方文化研究が進められてきたのも現実である。しかも、戦前に収集された考古、民族資料、文献史料は日露両国に分散され、総体的な把握は未着手のまま現在に至っている。特に、北方四島は領土問題が未解決のため、現地での自由なフィールド調査は極めて困難であり、半世紀以上も研究者の立入は勿論、学術的な研究の進展していない空白の領域である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、先史時代における物質文化的連鎖現象の検証、先史時代から歴史時代における文化接触と文化拡散の検討、狩猟採集社会の持続可能な環境と資源の検討の3つのテーマを設定し、考古学を中心として文化人類学、民族学、民俗学、自然科学などからの学際的、かつ実証的な総合的研究を目指すこととした。

3. 研究の方法

研究方法は、先史人類の北海道側の出入口である北方四島（国後島、色丹島、択捉島、歯舞群島）のフィールド調査を主体に、国内外に保管されている考古・民族資料、文献史料の調査などを総括的に調査、研究を進めることとした。

北方四島はロシア連邦の実効支配化におかれていることから、ロシア側の研究協力者を次のとおりパートナーとして現地調査を実施した。北方四島では、ザジラコ, A. L. : 国後島古釜布郷土博物館、館長、スコヴァティツィーナ, V. M. : 国後島古釜布郷土博物館、研究員、イワノヴァ, O. B. : 国後島古釜布郷土博物館、研究員、カイルスカヤ, E. V. : 択捉島郷土博物館、館長などの尽力で共同を実施した。サハリン州の情報や調査協力などでは、イーゴリー, S. A. : サハリン州文化局、上級研究員、オリガー, A. S. : サハリン州郷土博物館、上級研究員の協力を得た。カムチャツカ州の情報や調査協力などでは、プタシンスキー, A. : 国立カムチャツカ大学、教授の協力をえた。

この成果を基に、日本北東部域の旧石器文化からアイヌ文化にいたる歴史・文化構造と、その人類活動史についてグローバルな視点で明らかにした。

4. 研究成果

研究成果は、次のとおり総括した。

北方四島の現地調査は、択捉島 16 カ所、国後島 94 カ所、色丹島 22 カ所、歯舞群島の勇留島 1 カ所、総計 133 カ所の遺跡データ（緯度経度、遺跡の種類、時代、遺跡や遺物状況など）を総括した。また、2018 年、2019 年の現地での学術調査では、現地で現存する遺跡について大きな成果をあげた。

国内機関に保管されている千島・北方四島の考古コレクションの総括的なデータ化を実施した。総括した考古コレクションは、市立函館博物館 582 点、釧路市立博物館 26 点、羅臼町郷土資料館 260 点、国後島古釜布郷土博物館 425 点、旭川市博物館 463 点、東京国立博物館 98 点、(独立行政法人)北方領土問題対策協会 54 点の総計 1,908 点の遺物の計測、出土遺跡、時代や年代、写真など詳細な資料データをまとめた。

千島・北方四島の物質文化的な連鎖は旧石器文化からはじまり、北千島ではカムチャツカの人々

と文化的融合が存在し、縄文文化からの狩猟採集社会の持続可能な自然環境と資源が存在したことを明らかにした。

旧石器文化～アイヌ文化までの長期、北海道の先史文化が主体的に存続していたことを明らかにした。

千島・北方四島の民族的な文化接触、あるいは中央社会との物流交易は、8世紀以降から強まることを明らかにした。

先の・・・は、北方四島の現地調査、または国内に保管されている千島列島および北方四島の考古コレクションなどのデータから明らかにしたものである。特に、北方四島の現地調査で総括した遺跡基本データは、現地でなければ確認できない情報が多く得られたことは重要であり、継続した調査が必要であり当時の原風景を示す遺跡が現存することや現地で破壊された遺跡など保存、保護についても大きな課題である。現地で確認し遺跡や史跡は、まだほんの一部であり先史時代はもとより、さらに江戸末の史跡の評価や明治、大正、昭和の近代化遺産についても保存、保護の検討が急務であり重要な課題である。

本研究は、2023年3月に研究成果の総括として、『北方四島と千島列島における人類活動史の考古学的研究』報告書を刊行した。先の成果はもとより、報告書にはシンポジウムの開催の記録を記載した。このことから、空白領域の研究は、本研究はもとより他分野においても新たな問題や課題が存在し、その解決に向けた具体的な研究が必要不可欠であることを指摘しておく。

また、本研究を進める上で、新型コロナウイルスの世界的猛威、ロシアのウクライナ侵攻にともなう影響を大きく受け、調査活動の制限、研究成果公開の制限などにより、当初計画の遅れが生じたことを付記する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 右代啓視	4. 巻 Vol.378
2. 論文標題 北方四島の歴史・文化を探る	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 文化財情報	6. 最初と最後の頁 pp.6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 右代啓視	4. 巻 なし
2. 論文標題 カムチャツカ地方総合博物館所蔵の草皮遺物 - ガルガン 遺跡出土資料を中心に - .	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 北方寒冷地域における織布技術と布の機能	6. 最初と最後の頁 pp.111-118.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 右代啓視・鈴木琢也・東 俊佑・猪熊樹人・天方博章・ザディラコ, A. L.・イワノヴァ, O. B.	4. 巻 第5号
2. 論文標題 北方四島における考古・歴史学の総合研究（ ）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 北海道博物館研究紀要	6. 最初と最後の頁 pp.149-168.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 右代啓視・鈴木琢也	4. 巻 150
2. 論文標題 2019年北方四島学術調査 国後島ヤンベツ・小田富の遺跡群	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 季刊考古学	6. 最初と最後の頁 pp.161-164
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 USHIRO, Hiroshi and SUZUKI, Takuya	4. 巻 No.13
2. 論文標題 Remains of Kunashiri Island - from Research on the Materials Collected in the Yuzhno-Kuriliskij Regional Museum -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Research Association of Cultue in Northern Lslands.	6. 最初と最後の頁 pp.39-56.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 右代啓視・鈴木琢也・高橋勇人・天方博章・野沢緯三男・谷内紀夫・スコヴァティツィーナ,V.M.	4. 巻 第4号
2. 論文標題 千島列島における人類活動史の考古学的総合研究() 特に北方四島の先史文化研究を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 北海道博物館研究紀要	6. 最初と最後の頁 pp.163-178
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 右代啓視	4. 巻 Vol.14
2. 論文標題 もう一つの歴史・文化の道 - 北海道から千島列島、カムチャツカ -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 北海道博物館「森のちゃれんがニュース」	6. 最初と最後の頁 pp.4-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件(うち招待講演 15件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 右代啓視
2. 発表標題 北方四島の歴史・文化の評価
3. 学会等名 羅臼町教育委員会(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 右代啓視
2. 発表標題 未来につなぐ北方四島の歴史・文化
3. 学会等名 北海道博物館、羅臼町教育委員会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 右代啓視
2. 発表標題 択捉島における江戸後期の墓
3. 学会等名 北方島文化研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 右代啓視
2. 発表標題 北方の人類活動史
3. 学会等名 札幌市社会教育協会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 右代啓視
2. 発表標題 アイヌ文化のチャシを考える
3. 学会等名 アイヌ民族文化財団（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 右代啓視
2. 発表標題 北方四島の歴史と文化
3. 学会等名 北方四島交流協会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 右代啓視
2. 発表標題 アイヌ文化のチャシを考える
3. 学会等名 アイヌ民族文化財団（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 右代啓視
2. 発表標題 日本列島北部の先史美術と岩面画
3. 学会等名 A.S.L.V.E.先史学センター国際会議（フランス・アングレーム）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 右代啓視
2. 発表標題 北方の人類活動史
3. 学会等名 札幌市社会教育協会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 右代啓視
2. 発表標題 北海道の人類活動史からみたアイヌ文化
3. 学会等名 札幌聖心女子学院（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 右代啓視・鈴木琢也
2. 発表標題 2018年の国後島調査報告
3. 学会等名 北方島文化研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 右代啓視
2. 発表標題 北海道の人類活動史
3. 学会等名 札幌市社会教育協会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 右代啓視
2. 発表標題 北海道の人類活動史
3. 学会等名 札幌市社会教育協会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 右代啓視
2. 発表標題 北海道の人類活動史
3. 学会等名 札幌市社会教育協会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 右代啓視
2. 発表標題 北海道のチャシ
3. 学会等名 北海道立図書館（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 右代啓視
2. 発表標題 北方四島における歴史文化専門家交流
3. 学会等名 北海道北方領土対策本部（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 右代啓視
2. 発表標題 北方の人類活動史
3. 学会等名 札幌市社会教育協会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 右代啓視
2. 発表標題 擦文文化の古環境
3. 学会等名 余市水産博物館（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>北方四島における考古・歴史学の総合研究（ ） http://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp/wp-content/uploads/2020/04/bulletin_HM_vol15_05_p149_168.pdf 千島列島における人類活動史の考古学的総合研究（ ） 特に北方四島の先史文化研究を中心に http://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp/wp-content/uploads/2019/04/bulletin_HM_vol14_05_p037_056s.pdf もう一つの歴史・文化の道 - 北海道から千島列島、カムチャツカ - http://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp/wp-content/uploads/2019/01/news201812_vol14.pdf</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	東 俊佑 (AZUMA Syunsuk)	北海道博物館・研究部・学芸員	
研究協力者	天方 博章 (AMAKATA Hiroaki)	羅臼町郷土資料館・学芸員	
研究協力者	猪熊 樹人 (INOKUMA Shigeto)	根室市歴史と自然の資料館・学芸員	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	桐澤 国男 (KIRISAWA Kunio)	根室市史編さん・委員	
研究協力者	久保 浩昭 (KUBO Hiroaki)	旧国後根室間海底電信線陸揚庫保存会・会長	
研究協力者	小林 万里 (KOBAYASI Mari)	東京農業大学・教授	
研究協力者	高橋 勇人 (TAKAHASHI Hayato)	釧路市立博物館・学芸員	
研究協力者	谷内 紀夫 (TANIUCHI Norio)	松浦武四郎研究会・会員	
研究協力者	西村 裕一 (NISHIMURA Yuichi)	北海道大学大学院・准教授	
研究協力者	西谷 榮治 (NISIYA Eiji)	元利尻町立博物館・元学芸課長	
研究協力者	野澤 緯三男 (NOZAWA Isao)	松浦武四郎研究会・事務局長	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	福田 裕二 (FUKUDA Yuji)	市立函館博物館・学芸員	
研究協力者	本間 浩昭 (HONMA Hiroaki)	NPO法人北の海の動物センター・理事	
連携研究者	鈴木 琢也 (SUZUKI Takuya) (40342729)	北海道博物館・研究部・学芸員 (80101)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
ロシア連邦	Yuzhno-Kurilsk Regional Museum	Kurilsk Regional Museum	